

AWAJIDONZA

漁師着“ドンザ”から見た 淡路島の藍染文化の特徴とその継承支援プロジェクト

兵庫県立大学大学院 緑環境景観マネジメント研究科 12期生 岡本 佳奈



ドンザ

藍で染めた木綿布を数枚重ね、
防寒や補強のために刺し子を施した衣服

地域によっては、農家の仕事着などもそのように呼ばれていたが、西日本では主に漁師が着ていた。淡路島に残っている32着のドンザは、全て漁師が着ていたもので、仕事着としてだけでなく、普段の上着として、1950年頃まで使われていた。

「板子一枚下は地獄」と言われるように、漁師の仕事は厳しく、作り手の女性たちは、身の危険が多かった漁師の夫や息子の安全を願い、魔除けや豊穰の意味をもつ麻や柿などの模様を施した。既往研究によると、制作には長い時で5年もかかるくらい、柄を合わせるのが難しく、自分でできない人は、得意な人に頼むこともあったそうだ。

淡路島ドンザの特徴

1 他地域と比べると、綺麗な布に、緻密な模様を全面に刺し子したドンザが多く残っている。

2 お尻部分の模様は、他地域のドンザには確認されず、淡路島の中でも北淡地域のみしか見られない。

現役漁師によると、袖部分が擦り切れることが多いそうだ。そのため、お尻がよく擦り切れやすいから、刺し子を沢山施されたという訳ではないようである。既往研究によると、作り手は、面白い模様のドンザを着ている人がいると、近づいて模様を調べ、真似されたら非難されないように、工夫を重ねたそうだ。それらの記述から、北淡地域の女性たちが、工夫を凝らす過程でこのような尻当て模様が生まれたと推測する。



背景

【課題】 淡路島のドンザと藍染文化の継承

—ドンザ—

- ①ドンザを知っている人が少ない。
- ②淡路島のドンザに関する既往研究は3件のみ。

—藍染文化—

島内の紺屋などのランドスケープ遺産を含めた藍染文化についての調査は見受けられない。

【ポテンシャル】 淡路島でのドンザの価値は、以下の商品制作のヒントになっている。



1. プロジェクトの背景と目的

目的

- 1 淡路島のドンザと藍染文化の特徴を明らかにし、
- 2 それらの継承のあり方について考察することを目的とした継承プロジェクトを実施する。

プロジェクトの流れ

- ◆調査 ①淡路島のドンザの特徴解明
②紺屋などの藍染文化の特徴解明

- ◆上記の結果を踏まえた継承支援プロジェクト「DONZA展」の企画実践

- ◆継承支援プロジェクト「DONZA展」の結果を踏まえてのさらなる支援活動の展開

調査方法

- 2021年4～6月 淡路市北淡歴史民俗資料館や漁師8名へのヒアリング調査
- 2021年9～10月 老人クラブ長（340人、年齢：60～80代）を対象としたアンケート調査
[有効回答数：淡路市68名、洲本で45名、南あわじ市79名 計192名]
- 2021年5～6月 淡路島内17漁業協同組合を対象にアンケート調査 有効回答数：2か所
- 2021年5～10月 島内で地域づくりに取組む活動家など計8名にヒアリング調査

1. プロジェクトの背景と目的

2-1. 島内におけるドンザの認知状況

老人クラブ長を対象としたアンケートより

ドンザの所有・認知状況

	淡路市	洲本市	南あわじ市
回答者数	71人/113人中 (62.8%)	45人/60人中 (75.0%)	77人/167人中 (46.1%)
知っている・聞いたことがある	32人 (45.0%)	10人 (22.2%)	27人 (35.0%)
持っている	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)	0人 (0.0%)

淡路市の認知度が一番高く、当時のことを知らない人でも、北淡資料館の展示で見たことがあると回答していた人もいた。今回の研究対象としている、木綿布を数枚重ねた刺し子のドンザではなく、「綿のに入った」ドンザ、どてら、コシギリと呼ぶものを知っていると回答した人もいた。既往研究より、綿のに入ったものは、木綿布を重ねて刺し子したドンザよりも、後に着られるようになったものと考えられる。

ドンザの使われ方

場面	使われ方	件数
沖合	冬場に祖父が着て、小さな漁船で沖へ蛸を釣りに行っていた。(85歳女性)	2
作業場	漁港で漁師の人が網の縫いをする時に着ていた記憶がある。(77歳男性)	3
焚火を囲む・冬の防寒着	昭和20～24年頃、高齢の漁業者あがりの人たちが冬場、ドンザをまといながら暖をとっていた記憶がある。(83歳男性)	7

ドンザは冬の防寒具として、沖合や作業場、焚火を囲んでの団らんの場など、多様な場面で使われていたことが分かった。

模様の意味 一部紹介



麻の葉

麻の葉は葉の先が尖っていることから魔除けの意味が込められた。



笹の葉

七夕飾りにも使用される神聖なものでもあり、商売繁盛の意味も持つ。



銭刺し

コインが斜線によって閉じ込められており、家からお金が出ないようにという願いがある。

2. 淡路島ドンザの特徴

2.3 淡路島に残るドンザの所在状況

石屋神社

氏子さんから譲り受けたドンザ3着は、現在、毎年3月に開催している恵比寿舞で使用している。恵比寿さんの誕生から、恵比寿さんが鯛を釣るところまで演じ、途中、木の舟を漕ぐ船頭2人が、ドンザを着るのだそう。



岩屋個人宅1

岩屋の網元であった元漁師Yさん（現在100歳・大正11年生まれ）が、若い頃に着ていたもの。1950年頃まで、冬にドンザを羽織って、お正月の魚、なまこ、瀬戸貝などを採り、神戸に売りに行っていたのだそう。Yさんの弟（現在90歳・昭和8年生まれ）も、漁師になり始めた小学生の頃から、ドンザを持ち、神戸に行商に行く時に着ていたという。子どもで、ドンザも着ていたからか、「珍しいの着てるね」とよく声をかけられたようだ。漁の後の学校はとて眠くて、ドンザを布団にして寝ていたくらい暖かかったそうだ。

また、ドンザの前を、藁の縄で留めていたようで、子どもの頃に、若い漁師たちが、「刺し子のドンザに縄の帯 漁師するような粋な人」というフレーズがある歌を漁師の祭りで歌っていたと語ってくださった。



ギャラリーさなえ

阪神淡路大震災がきっかけで、富島の漁師宅で捨てられていたドンザを、知人が譲り受け、刺繍好きのさなえさんに持って来てくれたのだそう。



岩屋個人宅2

徳島県阿南市椿泊町出身で、現在、洲本在住のOさんが、要らなくなり、岩屋の知人に差し上げたのだそう。Oさんの母方の家系が、何代か前まで漁師で、五島列島を拠点に東シナ海の方まで出漁していたとのこと。このドンザは、大正から昭和あたりのものだと思われる。



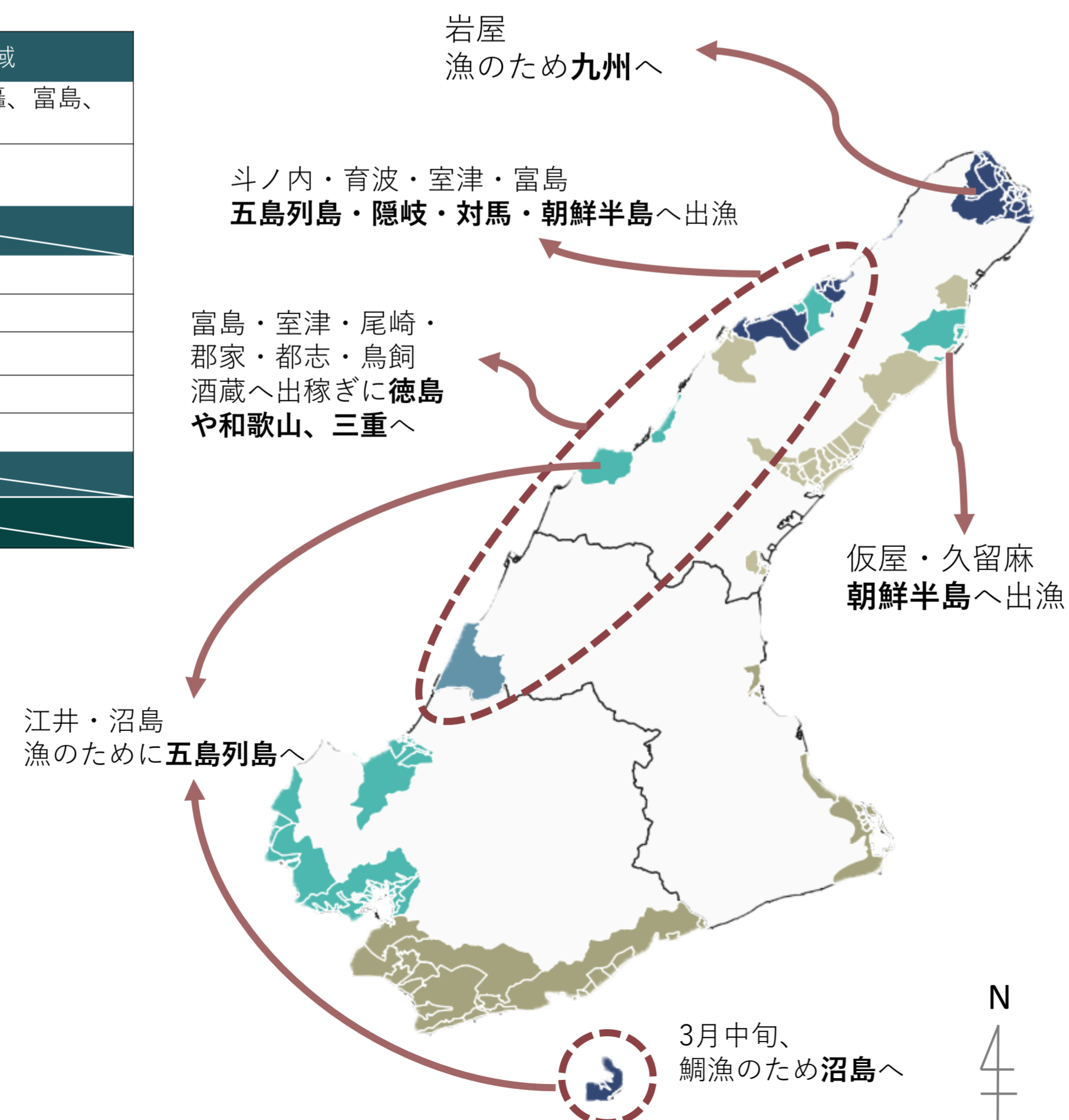
沼島個人宅

沼島の漁師K宅では、先祖が着ていた3着のドンザを今も大切に保管している。それらは、昭和20年代に沼島で起きた大きな火事で、たまたま焼けなかった建物に残っていた。Kさん（86歳）によると、家の人は、家でドンザを、仕事でコシギリを着ていたとのこと。



2.4 漁師の出稼ぎ航路とドンザが存在した地域との関係

保持者	数	入手地域
淡路市北淡歴史民俗資料館	22	旧北淡町 野島轟、富島、斗ノ内、育波
洲本市立淡路文化史料館	1	旧北淡町
公共所有の合計数	23	
石屋神社	3	不明
岩屋個人宅1	1	岩屋
ギャラリーさなえ	1	旧北淡町 富島
沼島個人宅	3	沼島
岩屋個人宅2	1	徳島
個人所有の合計数	9	
総計	32	



2.5 ヒアリング調査から得られた漁村の様子



尾崎在住 漁師（S29年生まれ）

昔、この辺りは農村地帯であったが、財がある人が舟を作り、漁を始めた。実家は、お爺さんの代から漁をするようになったが、子どもの頃は、半農半漁で、牛を飼い、玉ねぎやじゃがいもも育てていた。

尾崎では夏は釣り、冬は文鎮こぎ漁（底棲の魚介類をひっかけてとる漁法）で、昔は、山から砂が運ばれ、砂浜が広がっていた。しかし、近年、海岸がコンクリートで固められてから、浸食が進んで砂浜や海底の砂が少なくなり、カレイなどの魚が減っている。

釜口在住 元漁師（昭和9年生まれ）

小学5年生の頃から家業である、漁業を手伝っており、その頃、綿入の服を着ていた。昔、冬は寒くて、氷も張り、冷蔵庫の代わりに雪の中に魚を入れていたくらい寒かった。しかし、冬の閑漁期に、遠くまで出稼ぎに行くことはなく、洲本の方まで鯛漁で行くことや、土方（建築）をしに行っていた人もいた。

釜口在住 60代くらい 女性

子どもの頃、冬に田んぼの上のできた氷の上でスケートをしていた。釜口にある喫茶店アメリカの上あたりの土が粘土質で、昔、そこで採掘された土を使って瓦を造る店が多くあった。喫茶店の下辺りの地域は、瓦屋さんや土建屋さんなど、色んな店があり、栄えていた場所だった。

室津在住 元教師（77歳）

戦前、家の人は出資舟で朝鮮半島の方へ、生の魚を買いに行っていた。北淡の富島の漁師は、九州に出稼ぎに行く人も多く、魚と一緒に九州からの嫁さんが付いてきた。また、この辺りで冬場、長期間、海へ出かける家は、主人が、正月頃しか帰宅しないため、節分の豆まきを大晦日にしていた。

一宮井出在住 漁師（S20年生まれ）

昭和39年に中学校を卒業してから、親が戦中のもんべなどをつぎあてて作った「胴着」と呼ぶ綿入りの丈の短い衣服を着ていた。胴着は身分関係なく皆着ており、漁をする時も着ていた人はいる。法被のように柄のある紐や、漁業用の紐で前を留めていた。雨天時、綿入りの胴着は重いので、脱いで蓑（藁を打って柔らかくしたもの）を羽織っていた。

冬は季節風がきつく、何日も漁ができない時もあるので、徳島に出稼ぎに行っていた人もいたし、田畑の仕事をしていた人もいたと思う。

由良在住 成ヶ島の自然環境保護活動家（77歳）

由良は「由：良い、良：入江」で常に天候が良好な地域である。元々、要塞が半分を占めていた土地で、軍の拠点もあったため、漁ができなくても、遠くの地に出稼ぎに行かずとも、何かしらの仕事があったと思う。また、堺方面との交流もあり、新しいものが直ぐに入ってくる地域であった。

考察

既往研究によると、徳島で、刺し子のドンザが流行っていたようで、徳島県由岐町の漁師が五島方面へ出漁した際に、妻が出稼ぎ先で刺したという記述も見られた。特に、淡路島のドンザが、徳島や五島地方のものによく似ており、淡路島の西側地域や沼島の漁師が、五島列島への出漁、杜氏として徳島への出稼ぎをしていたことから、それらの地域でドンザを知り、島内にも広がったのではないかと推察する。

3. 淡路島の藍染文化の特徴

◆ 徳島県立博物館に訪問し、江戸時代、藍の豪商人であった、三木興吉郎が取引していた紺屋が、淡路島に110軒以上存在していたことが分かった。

◆ 元紺屋10軒の当時の位置を確認できた。

5軒が川から100m圏内

藍染めは模様付けのための糊を落とす作業などにより、多くの水を使用することから、川沿いに発達したものと考えられる。

4軒に井戸

一定の温度に保たれた井戸水は、染物で利用する水として適していること、さらに淡路島は水に乏しく、農業に井戸水や湧水を使う地域もあり、今回の調査で藍染めでも井戸水を使っていたことが明らかとなった。



文献記録・記憶・口頭伝承

浅野 S家 (80代あたり)

現在、神田鉄工所のある所に家があったが、家を離れる時に、甕などの道具を全て北淡資料館に預けたそうだ。

上河合 M家

初代が、三原からこの地に牛を連れて田んぼをし、染物もするようになったようである。元々、茅葺の家で、玄関に甕が置いてあったと先祖から聞いたそうだ。

北阿万 D家 (74歳)

近所のご高齢の方から、先祖が明治に染物業をしていたのを聞いたことがあるが、自宅に何も残っていないので、詳細は不明とのこと。

斗ノ内 現在K家 (80-90代あたり)

この地域で商店を営む女性によると、K家の場所に紺屋があったという言い伝えを聞いたことがあるそうだ。

東浦 Tさん

姑さんが、紺屋に出かけて行っていた記憶があり、また、東浦の小学校教頭先生の家が紺屋をしていたと聞いたことがある。しかし、昔のことで、どの場所にあったかまで、覚えていないとのこと。

阿万 D家

阿万小学校校門前に紺屋があったそうで、お話を聞いた71歳の男性によると、小学生の時には、紺屋ではなく、小学校の教材を売る文房具屋さんになっていたそうだ。

一宮 O家 (昭和20年生まれ)

一宮町史に紺屋を営んでいた人の名前が記載されており、同じ名前の方に電話したところ、自分の曾祖父だと言う。しかし、家に何も残っていないと、近所の方にも聞いたが情報が無いとのことだった。

生穂 旧H家 (90歳)

父の先祖にあたる6代目きゅうざぶろうの兄が紺屋を継ぎ、当時、津名東小学校の裏に家があったのだそう。津名町史に紺屋をしていた人の名前が記載されており、H家と思われる名前も見られた。

地頭方 T家 (73歳)

家業は、染物屋で4代前(大正期)は、藍甕を使って作業をし、従業員たちが、技を覚えて自宅で営むようになったと先祖から聞いたそうだ。

紺屋跡が残る場所

室津 旧Y家

明治10年頃生まれのお婆さんが亡くなるまで藍染めをしていたそうだ。現在も六角形の井戸が残っており、この井戸水を使っていたと思うと子孫は語る。

生穂 M家、旧K家

生穂川の板屋橋付近に紺屋と呼ばれていた家が2軒ある。北淡出身のK氏に誘われ、当時、東浦で儲かっていた藍染めをM家も曾祖父の代に始めたのだそう。藍の染料は阿波藍を買っていた。旧K家の玄関の床下に潜ると、8つほどの藍甕が埋まっている。

一宮井出 I家

築130年の家で、土間の床に穴が空いていたり、井戸があったようであるが、改装しているため見ることはできない。I家の主人によると、嘉永3年生まれの代に藍染めを始めたのではないかと語る。今も、甕や紺の文字が入った箱や焼印が残っている。



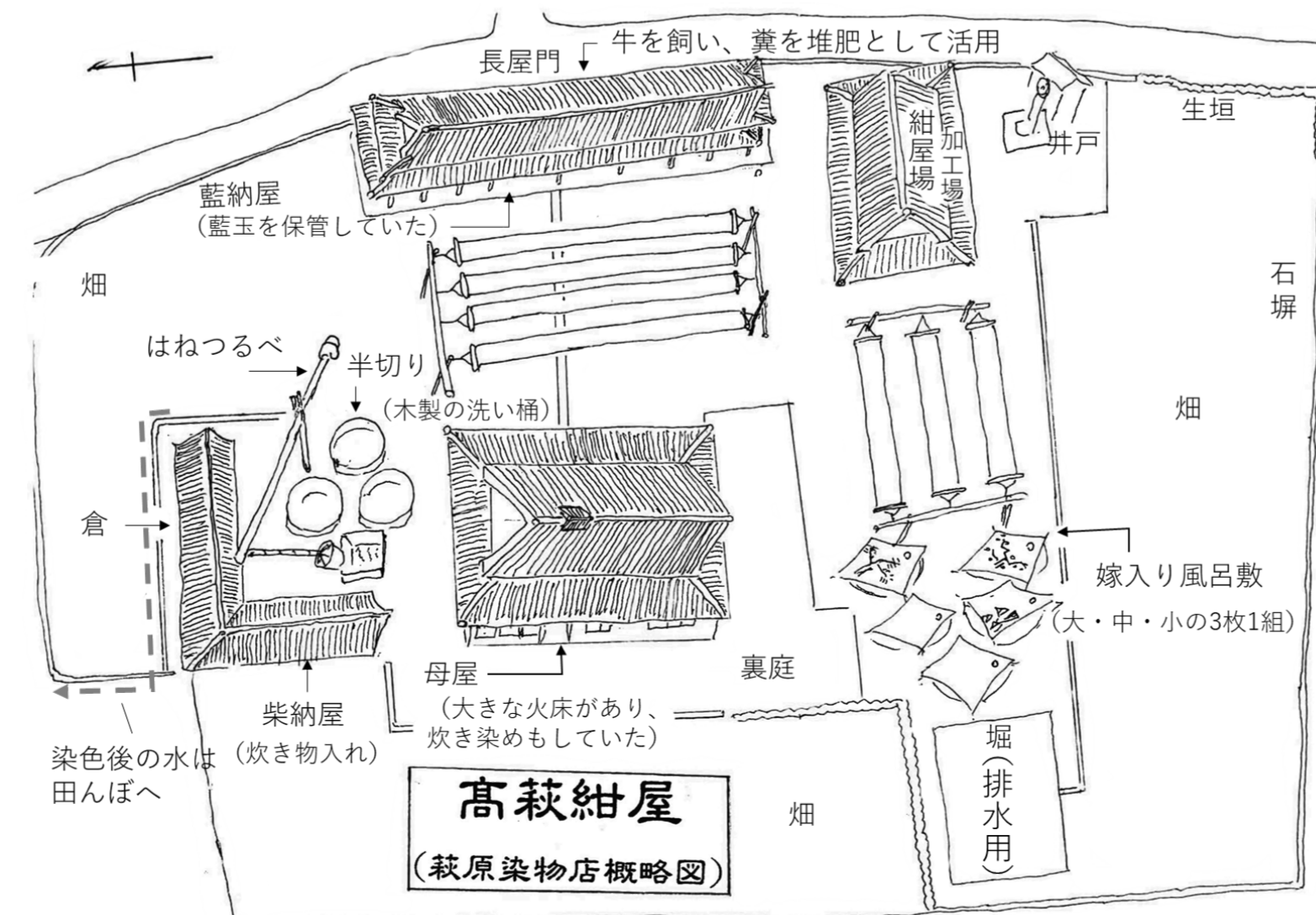
紺屋の屋敷構の特徴

南あわじ市賀集福井 H家

H家には、染めを生業としていた頃の屋敷構の特徴が今も色濃く残っている。

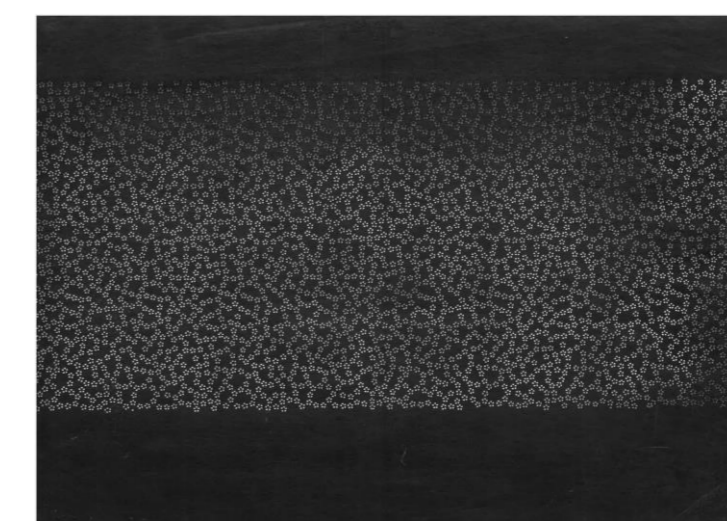
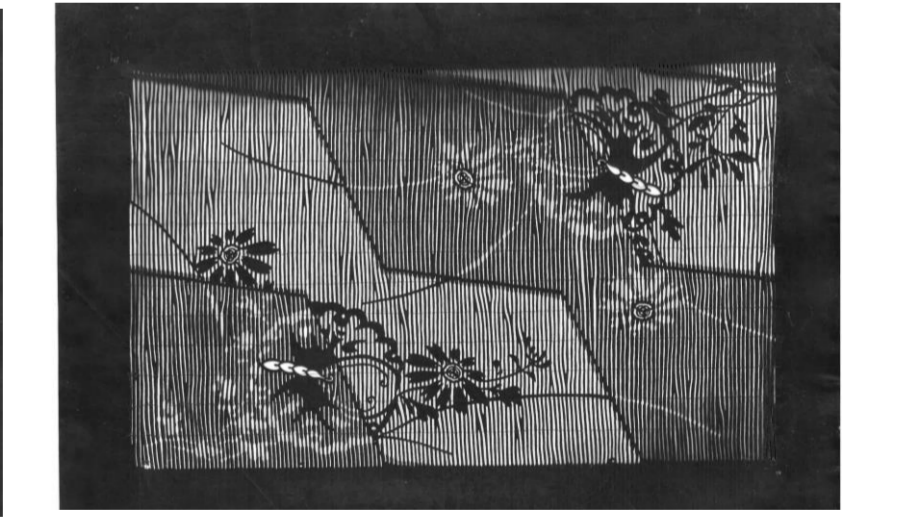
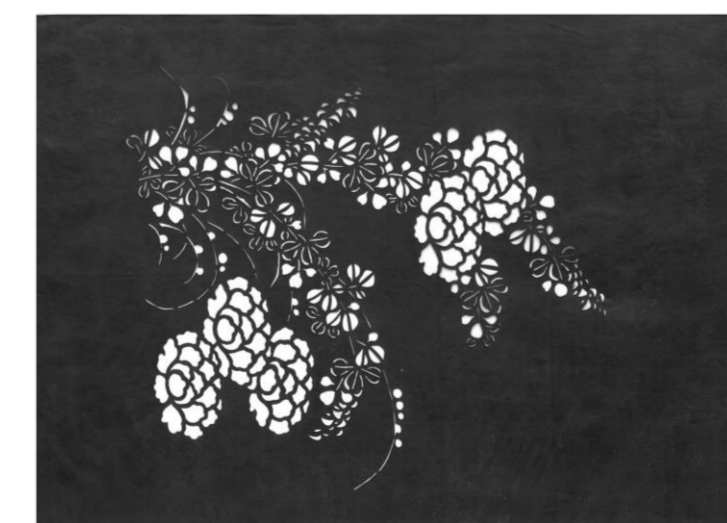
使用していた水は、2つある井戸水を使用し、内1つは水を一気にくみ上げられる「はねつるべ」を使用していたことから、染色には大量の水が必要であったことがわかる。また、染めた後の水は近くの田んぼに流していた。

長屋門では牛を飼い、糞を堆肥として活用し、門の一角に染料となる藍玉を保管するスペースを確保、前庭は染色後の布を乾燥させる場として活用されていた。このように淡路島の伝統的な屋敷構をうまく活用しながら藍染めをしていたことがわかる。また、母屋で炊き染めをしていたことから、今も天井が黒ずんでおり、当時の染めの様子をうかがい知ることが出来る。



【淡路島に残る紺屋の屋敷平面図 (萩原重幸作を筆者が加工)】

模様付けのための型紙1,000枚や、近所の人々が描いてくれた染物屋の広告も残っている。

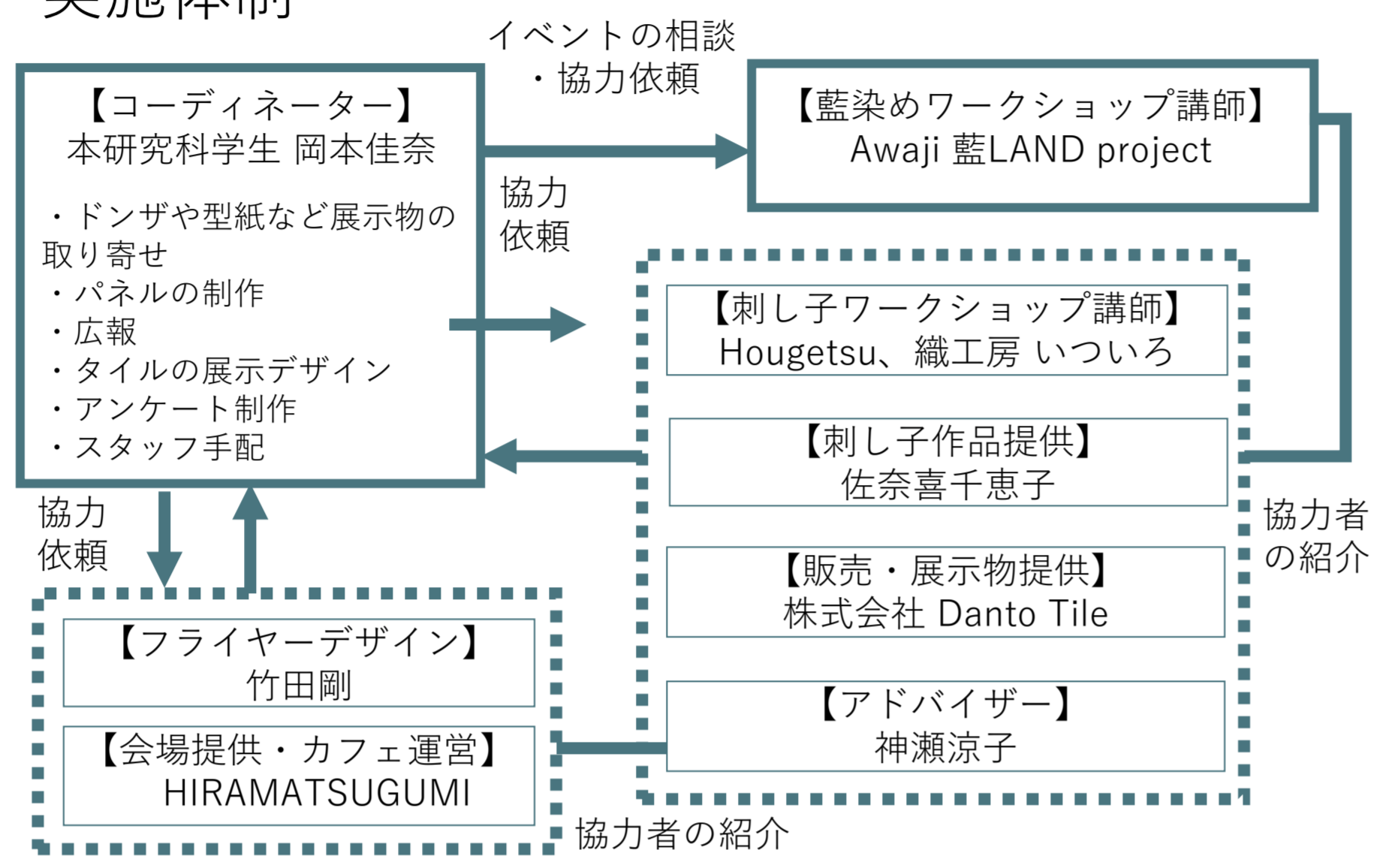


イベント「DONZA展」開催の目的

ドンザや藍染めを多くの人に知ってもらい、それらが様々な形で活用可能であることを理解してもらおう。

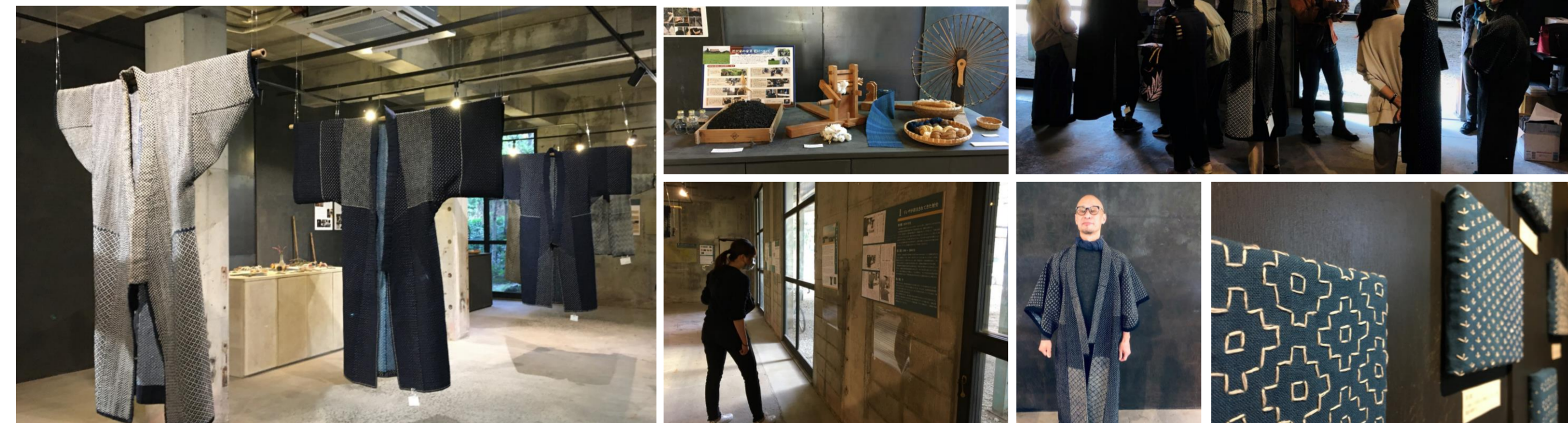


実施体制



イベント内容

展示 個人所有のドンザ8着、調査パネル、藍染めや木綿紡ぎの道具を展示。加えて、内1着は試着可能とし実際の重さや暖かさを体験してもらった。また、藍染めされた布に刺し子模様を施し、それをキャンバスに付けて模様の意味とともに紹介した。



ワークショップ 淡路島で栽培した藍で、ハンドタオルやてぬぐいを藍染めする体験や、藍染めしたマスクにドンザに施されている模様を刺し子する体験を実施。



カフェ 藍の葉を入れたドーナツや藍茶、ドンザ模様をかたどったクッキーを提供した。



展示販売 藍茶、刺し子模様の服やタオルなどを展示販売。

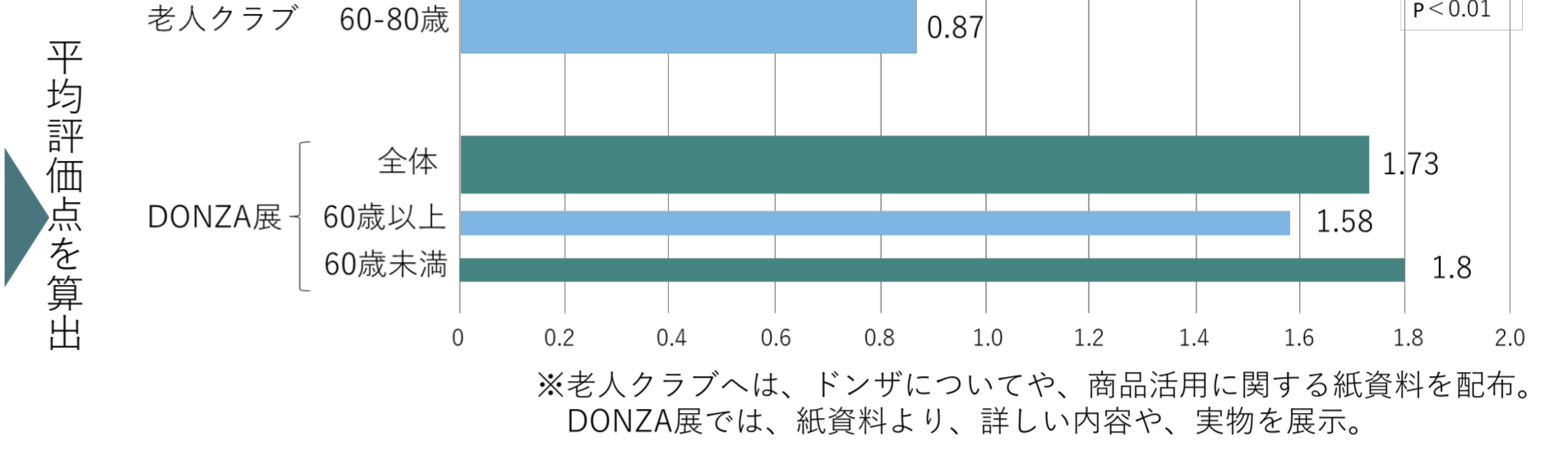


イベントの成果

島内だけでなく、四国・中国・関西圏より、小学生から90歳までの210人に来場いただいた。来場者の内203人の方に、アンケートにご協力いただき、老人クラブへのアンケート調査でも質問した、以下の質問から、イベントがどのような影響を与えたかを数値で表した。

Question.
ドンザを未来に残す必要はあると思いますか？

0.残す必要はない
1.どちらかと言えば残す必要がある
2.残す必要はない



アンケートの自由記入欄に、123人の方からコメントをいただいた。コメントの一部を紹介する。

—イベント—
美しさと知的刺激が両方合わさった好企画だった。/ドンザを構成する藍、木綿に携わる方など、いろんな方々が繋がってイベントになっていて、素敵だと感じた。/調査・保全の活動が進むことは素晴らしい。

—継承性—
もっと沢山のの人に知ってほしい。/調査パネルがとても良く、冊子などにあれば購入したい。/何らかの形で現代にのみがえることができたら素敵だと思う。/元気なシニアの方から子どもたちに繋いでいくしくみを作ってほしい。

—活用—
以前からどんざの刺繍の素晴らしさに感動していてこれを機会に是非子どもたちに伝えていきたい宝物だと思った。もっと勉強して紙芝居にします。/ドンザの刺繍を使ったコースターなど小物を作りたい。/服の修理で活用したい。

—ドンザ—
[デザイン性]とてもオシャレで、モダンなテキスタイルデザインだと思う。/[機能性]試着すると、布がしっかりしていて、暖かった。/[ストーリー性]ドンザに眠る昔の人々の想いなどを感じられ、強く印象に残った。

—ドンザや藍染めなどについて知る・学ぶ—
刺し子ワークショップに参加し、先人の偉大さを感じた。/特別だと思っていた藍染めも生活と深く結びついていたと知って感激した。/淡路島の知らなかった文化や歴史を知ることができて良かった。/淡路島に衣生活の特徴はないと感じていたので、勉強になった。/地元の良さを改めて知る機会になった。/漁師である夫のルーツであるどんざを知れて良かった。

老人会の評価が0.87であったのに対し、DONZA展に来た60歳以上の高齢者の評価は1.58と有意に高かった。また、自由記入欄のコメントから、実物や調査資料を見たことで、ドンザは未来に残していく価値のあるものだという意識を持ってもらうきっかけになったと考える。

ドンザの活用アイデア

来場者の方に、島内で継承していくために、ドンザを現代版であればどのような活用方法が考えられるかをアンケートに記入してもらった。

- 【布】ハンカチ、てぬぐい
- 【服】エプロン、ショート丈のジャケット、コート、ストール、マフラー、Tシャツ、背守りの服
- 【キッチン】鍋敷きタイル、テーブルランナー、テーブルクロス、コースター、ポットカバー、鍋敷き、鍋つかみ、ランチョンマット
- 【家具】カーテン、玄関マット、椅子・ソファカバー、カーペット、ドンザ模様の布団、ベッドカバー
- 【美容】ブローチ、アクセサリ（ピアス、イヤリングなど）、化粧ポーチ
- 【その他】お守りの袋、ドンザ模様の名刺入れ、ブックカバー、チロリアンテープ、シュニル織の模様に入れる
- 【布系以外】
 - ・プロジェクトマップ、壁紙、スタンドグラス、お皿の絵付け
 - ・海外のクリエイターとコラボ、DIORやCHANELに売り込んでジャケットやトートバッグを作る。
 - ・15cmくらい（実物の1/10）サイズの可愛いドンザを作って淡路島のお土産として北淡歴史民俗資料館と淡路景観園芸学校で販売する。

5. さるなる継承支援の実践

藍染文化の継承支援

Awaji 藍 Land Projectより、事業兼施設拡大に向けた事業計画書作成の協力依頼を受け、敷地計画や庭のデザインを提案した。

【対象地】

兵庫県淡路市釜口1178前の畑（標高：78～85m）
元々は段々畑で、海と山が近く、畑の直ぐ目の前に海と空が広がる。

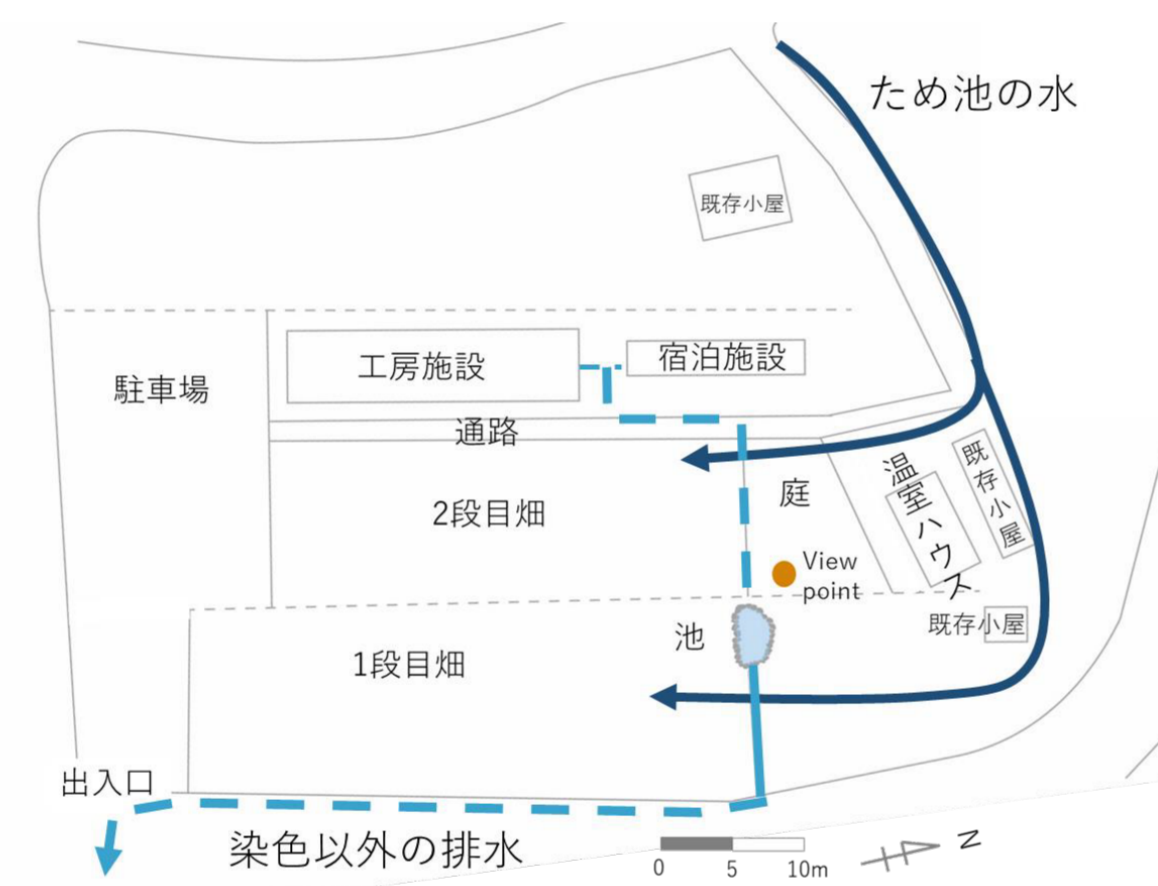


引用：地理院地図

引用：地理院地図

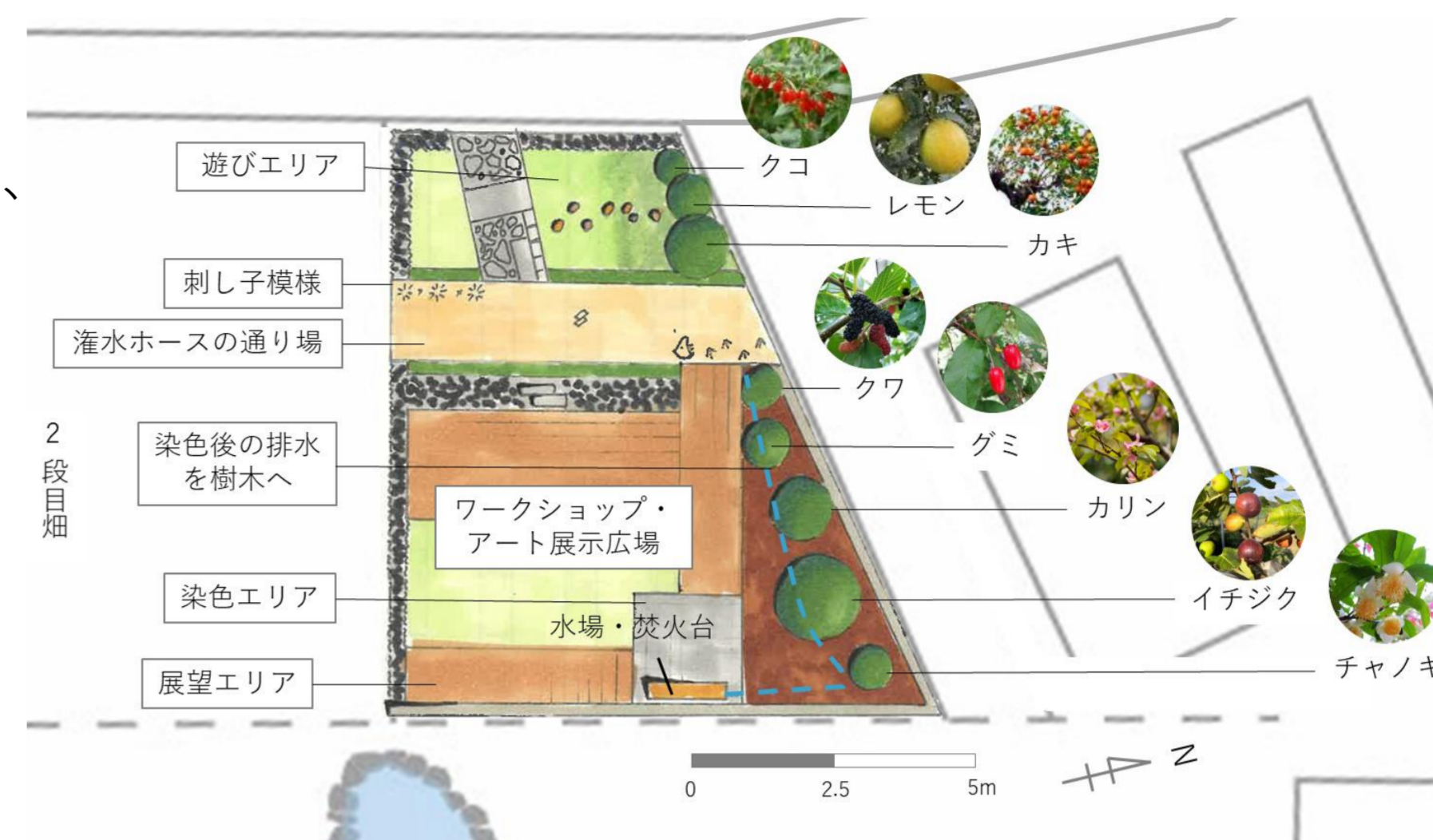
敷地計画

ため池が多い地域であることから、ため池の水を藍畑で使用するようにし、染色後の水は自然循環させるため、藍畑で使用できるように計画。染色以外の排水は畑横に造成する池や海へ流すことで、池の水性植物や海の栄養になるようにした。池の周辺には、湿地を好み、染色可能なコブナグサやジュズダマ、フキなどを植栽する。

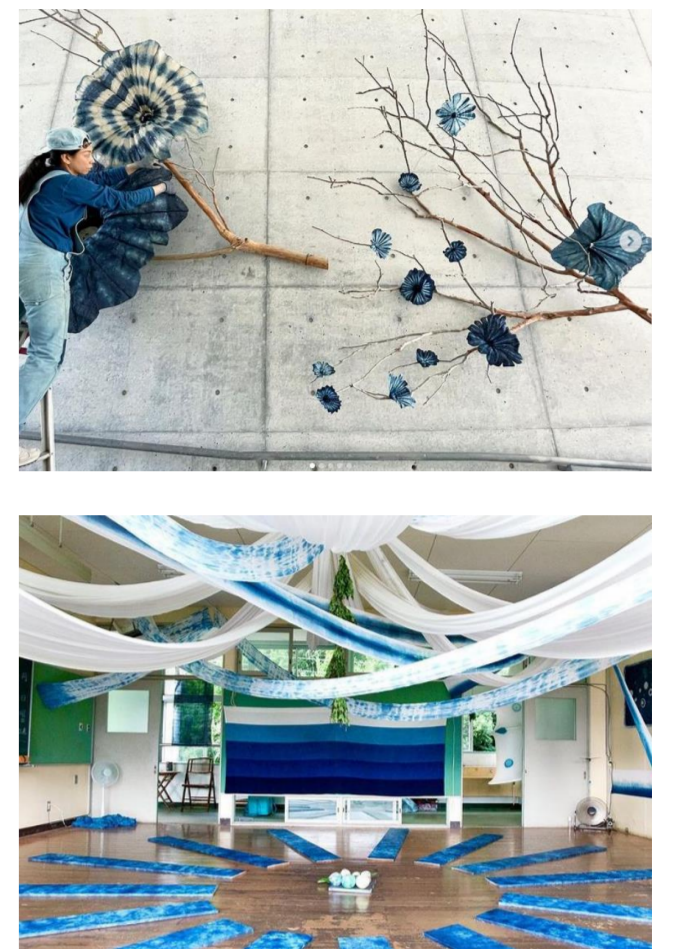


庭のデザイン

食用にもなり、草木染めもできる木々を植栽し、屋外でも染めの体験ができるように、水場や焚火台を設置。また、庭で染色した時に使用した水を、植栽された木々へ流すようにした。その他、Awaji 藍 Land Projectでは、藍染めのアート作品を制作されていることから、藍畑や海を一望できる庭地でアート作品の展示会ができるような拓けた空間づくりを心掛けた。



アート作品展示様子



パンフレット作成

DONZA展実行メンバーや資料館の方が、お客様に、ドンザや淡路島の藍染めについて伝えやすくするため、淡路島のドンザや藍染めの解説パンフレットを作成した。

現在、北淡歴史民俗資料館、Awaji 藍LAND project、Hougetsu、織工房 いろいろ、株式会社Danto Tileに設置させてもらっている。



※設置しているパンフレットを、ご自由にお取りください。

6. 今後の展開

産業面での活用

Awaji 藍LAND projectで出た藍染めの端切れを使って、刺し子を施した、ミニドンザの商品化を目指している。この中には、お守りや鍵など、自分の大切なものを入れることができる。

【作り手】
高齢者コミュニティ・裁縫教室

【販売先】
マルシェ、道の駅など

御守りを下から入れて、ミニドンザでお守りを守ります～



交点の多さは、漁師の身を守る魔除けの思いあがあるという。

次世代への継承

小学校の次年度の授業で、家庭科や社会科で、ドンザの魅力や紺屋の仕事、漁師の出稼ぎなどについて取り入れていくことを学校の先生方と計画している。

【対象学校】北淡小学校

【学習プログラム】

1. ドンザに関する学習 北淡歴史民族資料館の見学
2. 藍染体験
3. 刺し子体験

ドンザを活かしたまちづくりをさらに進めていく